

魅せられて綴る藩文学（十六）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町）

第五節 京撰の旅

（二）猪飼敬所と中島米華

天保元年（文政十三年・一八三〇）三月十六日、猪飼敬所七十歳の冥が東山の碧雲樓に開かれた。

山陽は、その辭序に「羽二重説」を作り辭祝した。

この辭宴に出席した顔ぶれは、猪狩敬所をはじめ、四辻家の名代山路左衛門尉、その他諸太夫を始め、清水雷首、岡崎鶴亭、北小路梅莊、岩垣月洲、百々漢陰、鈴木撫泉、島津尋田、村田庫山、角鹿玄都、薩陞徳軒、近藤芳樹（當時田中氏）、妙玄寺儀門、的場復齋、中島米華、吉村斐山（秋陽養嗣）、岡本豊彦、中林竹洞、浦上春琴、小田百合、澤渡精齋など約八十名に上り、仁科白谷、貫名海屋、摩島

松南、黒田梁洲など七名は幹事にあたり、鳩居堂、積書堂（吉田治兵衛）等が取持人で進められた。

猪飼敬所は宝暦十一年（一七六一）三月二十二日生まれ京都の人、父は京都西陣の糸商、初め大橋自門その他に学び、二十二歳の時、儒に志し、巖垣竜溪に師事して経書を修めた。業成つて京都で講説したが、文化元年から文政元年の十五年間、津藩主藤堂高兎の賓師として招かれ、藩校有造館の設立に尽力した。

後、天保九年（一八三八）家を津に移し、その歿するに至るまで津藩の賓師として身を終えた。

その学は古註に基づいて諸家を折衷した。

当代一流の古註学者として名高い。

弘化二年（一八四五）十一月十日歿。八十五歳。

天下の大儒家、猪飼敬所七十歳の辭筵に中島米華も名流の列に加わっている。

その会の幹事の一人に、仁科白谷がいる。時に四十歳。

仁科白谷、寛政三年（一七九二）備前の生まれ、江戸に出て、業を亀田鵬齋に受け折衷学を学ぶ。

京都に上り、唯一の心友として挙げれば、摩島松南

だという。

白谷は『松南遺稿』の序で「余ノ京ニ居ルハ十又七年交ル所、猪飼敬所老人及ビ摩島松南一人ノミ、松南ハ同年ノ友、故ニ以テ交誼、殊ニ厚キヲ為ス。」と述べている。

よって今般の壽筵は、仁科白谷の首唱によって執り行なわれた。

後、仁科白谷は頼山陽が序に作した『羽二重説』に怒り、書を以て責めている。山陽の『羽二重説』の大意は次のようである。

敬所は京都に生まれた人ではない。しかし、京都において学問を大成した。

これは、丁度、関東でとれた綿で京都で羽二重を織るようなものである。

それに対して、自分（山陽）は田舎で勉強して、京に出て来た。

だから河内木綿というようなものである。

「ソノ粗ニシテ且、朴ナルコト固ヨリ王公ノ服ニ供スベカラザルナリ、而モ或ハ以テ民ノ用ニ充ツルニ足ラン」と。

これは羽二重と木綿との比喩を用いて、敬所と自分の学風を比較した洒落た祝いの文章である。

そして敬所の長寿にあやかりたいという言葉で終わっている。

この文に反発した京儒たちを刺激させた事由は、次のとおりである。

今まで交際もない老大家に対して、妙に馴々しい口調で語りかけている印象を与えたことにあると、いうのである。

それを代表して言ったのが白谷であり、白谷は「先生」といわず「翁」などといわるるは失礼極まるというのである。

最も山陽には敵対者が少なくはなかったようで、この仁科白谷もその一人であった。

よって、その会の終始を執り仕切った仁科白谷は、敬所から山陽に祝賀の文を依頼されたが、両者不和の間柄から、それを中島米華を仲にして求めている。

中島米華は白谷を京に上がって知り得たものの、その仲は親しかった。

よって、米華の力が功なして、山陽は喜んで『羽二重説』

なる文章を草して送つたものであった。

しかし、白谷の怒りの外、敬所は氣にいつていた。

敬所は「山陽の才氣、人に過ぎたり、而して文章を善くす。故にその言を發する。おのずから趣味の津津たるもあり、東坡の尋常説話、みな文をなすが如し。」と言っている。

また、敬所にはその会のこの一件につき、阿波の高木赤水に送つた書がある。

いま、それは「猪飼敬所先生書柬集卷七」の全文によつて、そのすべてが明らかである。

頼山陽、京居候へ共、拙子十九年前ト十一年前ト再度、圓山他ノ詩會之席ニテ邂逅致シ候而已、今般薛庭仁科白谷首唱ニテ、専ら周旋致シ候。白谷ト頼トハ先年姫路ニ論争有之、互ニ相嫉ミ居候。佐伯ノ儒臣中島増太（米華）去夏ヨリ遊學、壯年ナレト詩文ニ長ジ、江戸昌平饗塾ニモ數年居。江戸ニテモ才名有之候。此中島、頼モ仁科ニモ親シク、仁科ヨリ中島ニ拙子薛賀ノ文ヲ勸メサセ候處、頼モ平生拙子ヲ推シ居候故、欣然トシテ「羽二重説」ヲ作り、出席ノ志候ニ、少々故障有テ當日不參、

文章ノミ出シ候。彼文ニ拙子ヲ翁ト稱セシ事不遜ナリト、白谷大ニ怒リ、書牋ヲ以テ是ヲ駁セント、其文ノ疵瑕ヲ指摘シ、或ハ此文ハ戯ニ近シ、収録スヘカラスト云人モ有之候。野拙思フニ頼好意ニテ出セシ文、是ニ付、彼之罵辱ニ及フ事、心ニ忍ヒス。且翁ト書候者、此度詩文ニ兩人、和歌ニハ三人モ有之候。頼一人ニアラス、彼馬生傲慢ナル故ニ、人間ノ禮盛ニ議シ候。其拙子ヲ稱スルハ、實意ニ出候テ、虛美ノ文ニアラス。

中島カ序、平安山水之秀麗、拙子ニ鍾レリト、溢美浮誕ノ詞ニテ、畢竟文人ノ弄筆、拙子不勝讀候。其他モ多クハ博覽多識ヲ稱シテ、過當之稱賛諛詞ノミ、頼ノ文、翁トアリテモ、拙子ノ意ニハ悦申候、然レトモ仁科諸人ノ論止ミ難ク、拙子先月六日頼ヘ行、久々ニテ面會、文ノ疵瑕モ指摘シ、諸人彼是イハハ、翁ト先生ト書改メ候ヘトイヒシ處、指摘ノ處、書改可申、文牋翁ニ致シ候ハテハ不宜候。題ハ先生ト書スヘキ處、絹小ニテ如此ニ成候、書改可申候、此度書改メ來候、初ノ文トハ所々増損有之候。對面ノ節ハ、彼後生故、何ニテモ先生ト稱シ、崇敬

致シ候。西河折妄見セ候處、大二感賞、其他ノ著述
見度卜乞候。自著ノ外史一閱被下度下、元来拙子ト
ハ咄モ合候、拙子耳聾故、門人一人坐右ニ置キ、彼
ノ門生モ一兩人次ノ間ニ叩ヘ候ヘハ、相談之事ハ、
青天白日、頼文名高ク候故、此文世間ヘ弘リ候由、
書寫シ入貴覽候。以下略。

山陽が敬所を尊敬し、敬所が山陽の才識を如何に重視
していたかが知られる。

こうして、知り合つた機会を利用して、尊敬する学者で
ある敬所に「日本外史」や「通議」など閲読してもらつて、
文章を訂正する参考にしたという。

殊に豊後佐伯の顔、小米華も、夙に敬所の耳に入つてい
た事が解せるのではないか。

最もこの頃、米華は京に数月を過ごして、これら老
儒とも交わりをなして、その学才が知られていた。

それは、文政二年（一八一九）に、的場復齋（猪飼敬所
の門人）が、土佐日記新解の序を託されたとき、初稿の
訂正を頼山陽に乞いしめているが、この時中島米華を介
していることから知られるのである。

その敬所七十壽筵によせて、山陽の『羽二重説』のほか
に詩文二人、和歌に三人、また、中島米華の壽序は如何な
る文であつたか。

平安京の風景は日本一すぐれて美しい。

天下の名流ここに鍾る。と敬所のその壽筵を形容して称
えたのであろうか。

ほめすぎてみえすいた詞で、つまり、文人の弄筆で読む
にたえないといっているように、相当の文章を書かれた
ものと思われ、また、敬所に勝るとも劣らぬ力を持つてい
たと直に受けとめるならば、文章に秀でる敬所は、博学深
秀の人であつたといわざるをえない。

かつて、米華、江戸昌平覺に遊学のとき、松崎憚堂とも
文士の交わりがあつたとおり、文に秀でていたことは確
かで、敬所もその才名を識り、名流の席に列せしめるのみ
ならず序を求めたのである。中島米華 ここに至つて天
下の名流の中に伍しても、一頭地を抜いたのである。

(四) 仁科白谷と中島米華

前述のように、白谷が京に上つて十七年、心友として交わるころは猪飼敬所老人と摩島松南のみといつては、殊に交誼が厚かつた。

白谷の編著も幾つかあるが、中でも『十九友詩』は、彼の友人十九人の詩選を著したものである。



雙石先生著
鴻爪詩集
(上中下・三卷)

その十九人とは、かめだぼうさい 亀田鵬齋、かんちやざん 菅茶山、おかかてい 岡鶴汀、猪飼敬所、い 入江竹軒、武元恒（北林登）、大野益堂、韓聯山、北條霞亭、てい 納尚玉嶺、梁川星巖、摩島松南、野呂松廬、原田霞裳、垣内溪琴、武元登々庵、北林登々庵、中島増太、矢上快雨の当代の名流が列ねている。

そして、これらの詩人たちの名前の下割註わりちゆうのようにして、その特徴を短評したものであり、従つて中島米華歿（天保五年）後に編著されたので致死後の字名如玉としてゐる。

いま白谷が詩選した米華の詩を紹介する。

「咬炒豆こうしやまめ」と「兒索餐わらうさくさん」は既に記述したので略すが、この詩選には「咬豆行」と「求養行むしもち」とあり、詩中は「兒求養むしもち 婦乞錢・・略」の聯句にはじまつてゐる。

尚白谷は、「讀此二詩足以知伊物二家之品亦足以知如玉之才」と評している。（以下略）

天保二年（一八三一）四月四日、山陽（五十二歳）は門人を召し連れて雅会へ赴く旨、宮原節庵へ手紙を書いてゐる。

その書中に中島米華も誘いたいことを伺つてゐる。

「其後ハ御疎遠ニ存候。舍弟自勢歸到候哉如何、今日八ツ半（午後三時）此ヨリ木屋町二條下あしわや座敷、讀岐和田濱・藤村音九郎（澹齋）ト申モノノ方へ参り候。門人内ニ書畫シテモラヒ度ト申シテ馳走サセ候テヨロシク候。足下御出ナレハ、別ニテ如獲一敵國候。其時刻ナリトモ又暮前カラナリ

トモ、右之方へ向御出可被成候。此方へ御出ナレハ、早キガヨシ(牧)善助モ申遣候。暮迄ハ居ルト申候。(中島)増太モ誘候へドモ、如何候哉。善助方ヨリ御出テモヨシ。」

いよいよ今夕木屋町へ赴くこととなり、節庵・百峯のほか中島米華へもそう言つてやったので、三人は同伴したであらう。

この日を最後に「頼山陽全書」の中に米華の記述はない。

この雅会に招かれたのも、米華のお別れパーティーを兼ねた会であつたのかもしれない。

第五章 佐伯藩の儒官

かくして米華は、天保二年に帰郷したのであらうが、何頃かは明らかにできない。

が、しかし、帰藩後に交わりがあつたと思われる事に、日向との交遊がある。

もつとも豊後と日向とは隣国であり、文士の交際もあつたが、その史実を裏づけるものに『鴻爪詩集』全三巻が

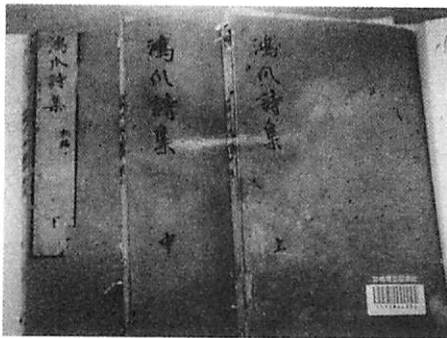
ある。

この中に「中島子玉還豊後此日風雪酔別旗亭」と、米華が天保三、四年頃、日向高鍋藩に、藩士秋月伯起(橘門)を訪ねた時の伯起の詩がある。

この頃、秋月伯起は郷にあつて医



雙石先生著
鴻爪詩集
(上中下・三巻)



を開業していた時であり、かねてより米華との交わりは長く深い間柄であつて、この時二十有余年ぶりの再会であつた。(小伝参照)

中島子去遠粵後此日風雪驟別旗亭

南浦舟膠不可渡
 迎喚牽袂上旗亭
 憶曾促結文字緣
 此刀所墮落雪斤
 日到天心宵炸疥
 此夜此情洵可樂
 起望凍雲蔽翠微
 離情併送滿瓢酒

婦人侵雪迷歧路
 呼酒壓寒話平素
 換遊不負花日妍
 耽著無算詩滿筵
 花樹注濛香霧滴
 豈思山川忽離康
 一葉風雪犯此歸
 前途為君覆寒威

米華のこの日向日行きは、藩命に依るものであつた。

期を初春(正月)を以て出発し、公務終わり次第帰藩する予定であつたが、有事遷延して果せず、季春(陰曆三月)になつて帰途についたが、はからずも風雪強く舟止めにあい、旗亭に橋門と共に一夜をあかした情を詠んだものである。

さて、この有事とは何であつたのであろうか。米華は果たせずして帰藩した事からみると、人事であつたと推察したい。

すなわち、秋月伯起の佐伯藩儒官登用の事であつたと思われる。

この時、米華は藩儒であり、藩学強化を図る為、儒官招聘を余儀なくされたのであろう。

四教堂は、中島米華の歿後、その門弟高妻芳州が藩儒を命ぜられたが、疾の為幾なく辞し天保十二年(又は十四年とも)秋月橋門が自ら代を為したのである。

天保四年十二月初日(醒齋日曆卷六)の記に

「御勘定小林藤之助。及御普請役二名。自江戸至。檢海西開墾之地也。館豆田町。自十月半。至十一月初。

諸邦使者輻輳。喧闐極甚。府君歸府中島益多。別府一郎至。皆由開墾之役。奉國命而來也。益多來訪數回。飲宴亦屢矣。」

去る十月半より十一月初めにかけて海西開墾の地を検する為、江戸より公吏三名が西国に入り、その宿を天領日田豆田町の館とした。

これが為、西国（九州）の諸侯は、その使者を赴かせ、大歓迎したのである。

佐伯藩からは小林七郎左衛門に伴って、日田の事に熟知し、且明府の懇志蒙ったことのある中島益多が介副として差遣された。

「益多この度国命を奉り来たったものの、予が家を訪ねてくれたこと数回、予が大病時より九年目の相見である」と旧誼を温め、淡窓は再会の喜びを隠せなかった。

同年二月「發與中島益多書。」

依屋に託して中島益多へ宛てた書の中包は、淡窓の詩稿であった。

淡窓の徹底した愛弟子への愛情が伺えるではないか。

第六章 中島米華三十四歳の永訣

第一節 淡窓・同袍の哀惜

それから五ヶ月後の天保五年四月七日、佐伯の益多の父幹右衛門より淡窓のもとに一通の書状が届いた。

それは思いもかけない、益多病死の知らせであった。

益多が死に臨んで作った歌、「三月十五日こそ行くべけ

れ閻魔も花を看に行つた留主」によると、益多は既に終焉を悟っていたのであろうか、この日三十四歳の生涯を閉じた。

淡窓への訃報が四月七日であるから、二十日余り後の知らせであった。

益多自ら死を悟るからには、病の床に臥していたことが察せられるが、淡窓には一切知らされてなかったようである。

また、時を同じくして作られた詩文「絶命詞」は『臨終作』ともいわれ、今昔を問わず、数多の書篇に名詩として選評されている。

益多は字を致仕して如玉と改めている。

その時期は明らかではないが、この「絶命詞」を賦した時、既に致仕していた。

四月七日「佐伯中島幹右衛門使至。報益多死。致遺物

二品。且乞墓誌」と。

この書に接した淡窓の心境はいかばかりか、感涙一入胸にせまるものがあつた。

今年三十四歳、昨年日田に来て相見したことが、生涯の

永訣になろうとは思ひもかけなかつた。

「アア哀しいかな、子玉吾が門にあつて第一位の英才となす、世は知らざるはなし、そればかりではない、おとろえた老人がこの長い別れに逢うとは、去る冬来遊して大に懐しく思い病を慰めてくれた。それが永訣となつた。歳僅か三十有四なり、天は之に年をかせば、必ず將に名を後世に成さんとす、聖人天喪ノ嘆き、予もまたぬすみくらべん思ひを往事にめぐらせ、轉た痛恨を添ふ、なんぞまた思うなかれ」と。

淡窓は感嘆したのである。

「子玉は洒落た人なり。絶えて自分をおさえ謹み、うわべを偽りかざる容なく、人自から悦び之を愛す。然れども亦方正を守りたもつ、我塾に在る時、塾法猶寛、かつて同僚に誘はるる所となり、夜行にて酒を飲む、既にして其時を日曆に録し、その下に題して曰く「余平生なす所未だ人に対して言う可からずもの有らず。唯この事のみ先生に背く、謹んで再びすべからず」と。先生偶して日曆を見る。此に至つて感歎す」と、

記した日曆をかつて読んだことがあつた。

その時、健気な少年だと涙んだしたことを。今また思い出に涙んだしたのである。

また儒林評の中に、子玉の早逝を惜しんで「恨ムラクハ近年酒二耽ルコト大過シテ撰生ノ道ヲ失セリ。」と、酒に耽ることを撰生の道にそむく悪と考えたのである。

子玉の死は酒によるものではなかつたようであるが、酒を友としていた才子も、酒に溺れる一面をもつていたのである。

「子ガ門生数千、コノ人ヲ以テ第一ノ英才トス。予嘗つて之ヲ品シテ、其ノ人頼子成ガ下ニ非すと云へり、其ノ人ニ至テハ子成ヨリ賢ナルコト遠シ、惜哉、大成ニ至ラズシテ歿セリ。」と痛惜した。

天はまた淡窓の心に追い打ちをかけるかのように、此日は風強く雷鳴の激しい一日であつた。

益多の人才・學才に、大いに期待していた淡窓の心痛が伺える。

四月八日 「佐伯使去。發答幹右衛門書」

淡窓は幹右衛門の意に答え、子玉の碑文は自ら書す旨の承諾と哀惜の意を表した一書を託した。

それから二月後の

六月三日「夜中島幹右衛門書至。」

夜になって、再び淡窓のもとに幹右衛門から一通の書が届いた。今度は碑銘を請う願いと、遺品子玉集八巻が託された。

六日 「發答中島幹右衛門。」

淡窓は短い時間の中に、講業の寸時を惜しんで碑銘を認め、墓碑銘を『大智院徳勇日健居士』とした一書を佐伯からの使者に託した。

今日、佐伯市城西西町久成寺くじょうじにある子玉の墓碑銘がそれである。

そして半年が去った。

十二月十九日 「中子玉墓碑文成書之。」

廿日 「發與中島幹右衛門書。」

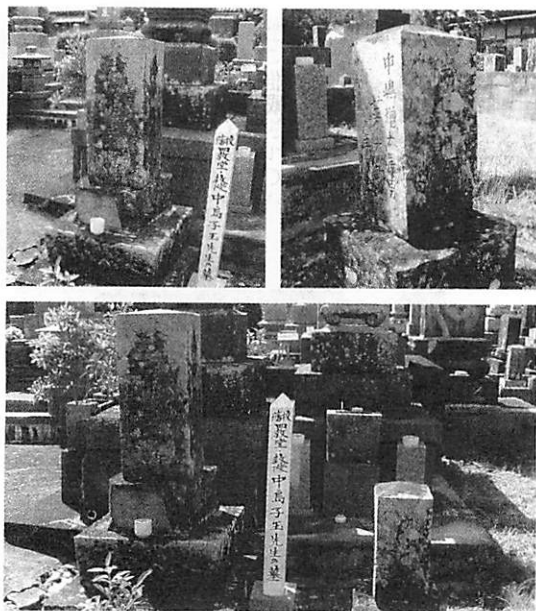
十二月といえは厳冬である。

この月の始め頃から日田盆地は雪また微雪の降りしきる日が続く中、淡窓は、去る四月七日に墓誌を依頼されていたその碑文が、八ヶ月ぶりにして成ったので、二十日になって中島幹右衛門にあてた墓碑文書を、久兵衛に頼ん

で佐伯行きさへりの飛脚に託した。

なお淡窓は、この碑文が託されて既に久しいが、看侍暇なく其後重哀に居るを以て今日に至ったことと、また「碑文ヲ予ニ請ウコト、子玉カ遺命ナリトソ。」とを付記されている。

おつて此に墓碑銘・碑文を記しておく。



〈墓碑銘〉

右 瑞光嬰子

中島増太長男 葉太郎三才

左 大智院徳勇日健居士

中島子玉先生（久成寺）

石柱表面に『大智院徳勇日健居士』の碑銘と、その左右に「天保甲午三月十又五日」（没年）刻し、そして、それを取り巻くように三面にわたって碑誌文が刻されている。

また、正面右側に嬰子の墓がある。

その墓の正面に「瑞光嬰子」とあり、右側面に『中島増太長男葉太郎年三才』と、また左側面には「文政十三年庚寅九月六日」と刻している。（因みに同年十二月十日より天保元年となる。）

それからみると、増太は藩にあつて『雅衍』二十二巻の編集をしている年に長男が生まれたので、嬰子の顔に接したのであろうが、死に至つてはその頃京に在つた。

因みに、既述した子玉の子孫に当たると言われる中島ナヲ（七三）は二男順之の後裔にあたると思われる。

それは確たる史料はないが、本論「佐伯藩出身咸宜園遊学者小傳」に記述した「中島順之」、この人は「咸宜百家詩篇」に推載されていて、父は子玉と記されていることから察するのである。

碑文

嗚呼是中島子玉墓也。子玉諱大賚。後改如玉。號米華。稱増太。豊後人。家世事佐伯侯。父幹右衛門。子玉少而穎敏好學。嘗在我門數年。既而適筑肥洛攝之間。與昭陽穀堂山陽敬所小竹諸老遊。皆評以才子無雙。又入大學。委贄於博士劉伺○先生。任於齋長。為祭酒林侯松平冠山侯所知。數加禮接。國侯聞之擢為儒官。使掌學政。青衿鄉風。勃々將興。會其卒。年僅三十有四。配字野氏。生一男。又蚤死。子玉為洒落。不務矯飾。



中島子玉の墓のある久成寺

人自愛敬之。詩文清新流利。筆先意走。實奇才也。遺稿愛琴堂集七卷。日本新樂府一卷。雜書未及編者。亦數十篇。臨沒口占曰。高情自與世人違。我是南豐一布衣。三十六麟猶缺二。今朝天上化龍飛。時天保甲午三月十五日也。遠近莫不歎情焉。墓在佐伯城東碧松山久成寺。碑面所題。其法○云。銘曰。何彼○兮桃與李。中郎有詩○而綺風捲く滄海迴瀾紫。中郎有文奇且詭。天假其才不假齒。人傷斯人忽爾。遺文不○百千祀。我謂斯人未未嘗死。

(文稿拾遺)

また、「六橋記開卷六中子玉傳」に曰く、

「以天保甲午三月十五日歿。年僅三十有四。歿前一日。戲賦曰。三月之十五日胡會行敵稽列。閻魔毛花雄看貳行多留主。歿時口占一絶曰。高情自與世人違。吾是南豐一布衣。三十六麟猶缺二。今朝天上化龍飛。子玉在宜園。為第一流才子。其歿也。先生每有天喪之歎。嘗曰。子玉不死。則賴子成同傳之人也。多曰。子玉天下奇材。然才藻未必無匹之者。至其忠信。不可及也。」と

林外(淡窓養子)もいつている。

又曰く、子玉は天下の奇材なり。然れども才藻は未だ必

ずしも之に匹すべき者無きにあらず、其の忠信に至つては及ぶへからざるなり。とその人格を高く評している。

なお子玉の死を嘆く宜園五子の一人であった劉君鳳(只谷儀策)は、子玉と共に宜園の双壁と言われた人物であり、仲がよく、共に学問・詩文の秀才で、宜園の二童とも呼ばれ『五子』中晩節を全うし得た唯一の人であった彼も、哭詩七言絶句を賦して悼んでゐる。

哭中子玉

千人一掃筆端風。到處詞場孰競雄。

子玉亡来眠始穩。普天無限晉文公。

また長梅外も子玉の死を悼んで七言律詩を賦して曰く

哭中島子玉

白玉樓頭召謫仙。忽聞載筆上雲○。

名花底事偏逢雨。好夢從來易作燈。

海内碩儒皆屬目。社中才子孰齋肩。

遺篇尤憶化龍處。六六年猶缺二年。

また廣瀬旭莊には、次の詩がある。

和島子玉丑時咀

玉樓瘦。銀海澁。行拂女蘿與露泣。廟扉已腐推無聲。

古佛吹氣敵帷濕。大樹槎枒老藤垂。落月變枝蹙絨眉。

冬冬釘樹深恨徹。此恨狂夫知不知。秋帳有人曉夢惡。

提劍起問夜何其。

篠崎小竹もまた子玉の死を惜しんで、「神駒空シク駿骨トナル。甚夕惜シム可シ。」と評している。

そして一年たった天保六年三月二十日、淡窓は中島幹右衛門に宛てた書と、愛琴堂集七冊を反している。(墓誌作成のためのものであったか。)

この愛琴堂集は、子玉の遺稿であり、去る年六月三日に淡窓のもとに寄せられた子玉集第八巻を、遺品故に親元に反したものである。(淡窓の蔵書目録に、その書物をみる事が出来なかった。)

淡窓が宜園に講業する限り、余暇は周辺を門生達を連れて散策し、詩作したりして涵養に勉めることはその後も続けられている。

子玉宜園六年間の生活には限りなき足跡がある。

淡窓は日々にその足跡を、今は哀愁の思いで辿るのである。

天保七年三月二十一日、淡窓は謙吉(後旭莊)外塾生を従え、高瀬上野に散歩している。

往々、かつて十八年前益多等と共に歩んだ道、今も変わ

らぬ躍動する自然の景観の中に、淡窓は唯一人、秋風の吹き脱ける思いであつたろう。

淡窓は、この日の事を次のように記している。

「此道十八年前、陪伯父及清記・益多所遇也。迫想往者。宛如昨日。而同遊者尤一存也。可堪潜然。」とさびしげな心の内が偲ばれる。

第二節 學 標

では次に、中島米華が京撰に遊んだ時、京撰の儒者たちは如何なる印象をもたれたか、いまかつて咸宜園の後輩にあたる謙吉が後に旭莊と号し、天保七年三十歳にして日田を去り、上国に旗幟を懸へさんと千里の雄志を抱き上阪して泉州堺に往き、五月十五日大阪について七月同地の専修寺を借り帷を下した。

その史実を「廣瀬淡窓・旭莊書翰集」に識ることができ

る。いまそれを旭莊が出した半年間の書翰にみると、旭莊は堺に在って京阪儒雅の士に交わり、僧雲華・篠崎小竹・後藤松陰・藤澤東峽・野田笛浦・貫名海屋・仁科白谷・摩島松南等と最も善くしたとある。

また七月五日の書翰、これは旭莊が大阪について五十日目に書いた第二信である。

京阪の儒者達の大歓迎を受け、世話する人が多くきまりがつかぬと、安石・恵學・龍澤は鄙びを勧め堺が宜しいと、小竹・大助・常次・沌五・淳宗甫・原田眞郷たちは大阪を勧める。

一行助・白谷・元端・春琴は京を勧める。

甚だ困ったが堺に暫滞することに決心した。

雲華上人は大いに悦び處々に吹聴下さった。

京師の人達には小石元端・浦上春琴・摩島松南・仁科白谷などに相見したとあり、仁科白谷との相見は矢上行助の紹介によるもので、『畸人二而増太莫逆ノ親友ナリ』と聞いていると。

益多は稀にみる奇才をもち、その思想に傾慕できる人材であると高く評価されている。

また十月二十五日朝書した第七信には、咸宜園大阪塾塾生の状況を書し、「只今評判宜クハ全南冥先生・中子玉二家之蔭也」といつているように、九国の遊学者達の碩学の足跡に感慨している。

十二月二十三日の第八信には入塾生のことについて書

している。

塾生九人に過ぎぬ、男性の炊事を嫌う結果、入塾生の増えぬことも塾勢不振の因となっているのかも知れないと、また来春までには妻子を呼び上げたいといっている。上国にあつては「休道の精神」は学志の戒めとならなかつたのか、また、江戸より旭莊のもとに書簡があつたことを重ねて書している。

「江戸ヨリ江戸儒者番付來。番付ヲ送り候者ハ佐伯ノ黒田慎吾（増太門人）、善庵大人之詩ヲ吹聴候由申來候。當時善庵第一候申風聞ニ候。一齋ハ流行後レノ由。」とある。

黒田慎吾（増太門人）については調べる資料もないが、中島増太が家塾を開業していたことは天保三年の調査であきらかである。

当時塾生男七十二名であつたが、それ以前の塾生であつたのであろう。

そして、いま旭莊との交わりがあるのであるから、この十ヶ月余りの期間に京阪に識り、後江戸に上り江戸の状況を知らせて来たものであろう。

また佐藤一齋の学問については、この時一齋が聖堂の

学頭になる三年前のことであるから、しかも一齋は内実は陽明学を信奉する人であるだけに、朱子学はゆるめられつつあった時代となるが、ここでは学派ではなく詩の作風をいつているのであろう。

第三節 佐伯藩の文学

廣瀬家は名家である。その廣瀬家を語るとき淡窓ぬきでは語れない。

淡窓を通してこそ廣瀬家の深さを知ることができよう。

全国六十有余国広しといえども、最も名声の高かったのが私塾「咸宜園」であつた。

十四、五歳の時医を業とせんと筑前から帰つて其の志を起したが、多病のため遠遊叶わず残念した。

また、眼医を学ぼうと決意したが、学ぶ志も終わりに廃してしまつた。

二十三歳になつて、吾を生かす道は学問しかないと決然として教授の志を定め、改勵して専心日夜開業の事に工夫を用いることとなり、書窓「咸宜園」を天下に轟かせる礎を築いた。

よつて咸宜園が輩出した世に名を為す人物は数多、その進む道は異なつていても、咸宜の精神は唯一つ違ふ事なく諸国に喧伝されたのである。

折しも文化・文政・天保の時代にかけて学問は極みに達していただけに、一門の英才に止まらず天下の俊英を日指す、即ち天下の頂天を目指し諸国に競つたであろうことを諸書にその足跡を知ることが出来るが、この中島米華を著して、改めて遊学とは実力本意の詩藻の応酬その連続であつたかと思ふのである。

明治の学校教育制度に、大きく貢献したと言われる咸宜園教育制度、天下広しと雖も、これほど理路整然とした制度はなかつた。

それは淡窓の整容そのものであつて、天下の教育者の偉名はここにもある。

米華はその偉名高き教育者に育まれ、淡窓宜園の書風に第一の高弟となり、天下の奇才と賞賛されて前途に大きな期待がかけられていたのである。

師の教えを心に染めて才能を開花した米華、正に淡窓に薫陶された米華は宜園の英であつた。

天資^{てんしけんこう}偉^{さい}朗^{りやう}、才藻^{さいそう}豊^{ほう}膽^{たん}でその詞華も雄偉であつたが、不幸

短命で中年に世を去ったのでその全才を示すことは出来なかった。

けれども臨終の詩句「絶命詩」は、今日猶人口にするところであり、また「美人十二詠」・「日本詠史新楽府」・「米華遺稿」・「愛琴堂集七卷」(内二卷は門人高妻芳洲等の編集した詩集である)等は、今も尚人々の魂をゆり動かす作品として不滅ならしめるものである。

米華生死三十四年春秋の生涯をその著述の中に見る時忠厚誠実の士であったことが伺え、またその作柄は淡窓が授ける家風の中葉にあったと言われながらも、郷国南豊の詩風は強く、格調高い詩藻に感銘させられるのである。

淡窓曰く「子玉死せざれば、即ち頼子成と同傳の人なり。」と、山陽もまたこの若き英才を「自家将来の標的となす。」と絶賛している。

林外曰く『成日。頼子成喜用血字。終吐血而死。中子玉喜死字。終早死。言亦不可不慎。』

しかし大成ならずとも名実共に佐伯藩の文学を築いたのである。

かくして米華の足跡は後世にその名を留め、後輩・門

人達の学標となり、かつまた遊学の道標となつて大きく貢献されたのである。

その事はまた、私達歴史を紐解く者の心に響れ高い文化の香りを漂わせ、人々の胸にいまも脈々と生きつづけていることを忘れてはならない。

米華中島大來生誕二〇〇年祭に寄せて贈る

平成二年 月 日 識